

房総半島における石刃石器群と槍先形石器群

島 立 桂

目 次

1. はじめに	3
2. 房総半島における石刃石器群の概要	3
(1) 市原市下鈴野遺跡第2文化層	3
(2) 四街道市御山遺跡Ⅷb文化層	6
(3) 佐倉市御塚山遺跡第7地点第2文化層	8
(4) 白井市一本桜南遺跡第7文化層	8
(5) 袖ヶ浦市百々目木B遺跡	10
(6) 千葉市南河原坂第3遺跡A地点	13
(7) 小結	13
3. 房総半島における槍先形石器群の概要	15
(1) 松戸市上貝塚貝塚	16
(2) 鎌ヶ谷市五本松No.3遺跡第V文化層	16
(3) 四街道市御山遺跡第Ⅷa文化層	17
(4) 佐倉市大林遺跡第9地点第Ⅱ文化層b	17
(5) 山武郡芝山町浅間台遺跡	19
(6) 小結	20
4. まとめ	20

1. はじめに

房総半島では、立川ローム層最上部のソフトローム層から2側縁調整のナイフ形石器と上ヶ屋型彫器を指標とする石刃石器群や槍先形石器を主体とする石器群が出土する。前者には、わずかな量ではあるが槍先形石器が伴っており、相模野編年Ⅳ期前半の石器群に共通する。いっぽう、後者にも、わずかな量ではあるが石刃ないしは石刃を素材とする石器が伴っている。それぞれの石器群には、主体となる石器群とは技術的に関連しない石器が含まれており、「構造外器種」とみることができる。

それでは、石刃石器群に伴う槍先形石器と槍先形石器群に伴う石刃の由来は、それぞれどのように考えられるであろうか。

また、石刃石器群と槍先形石器群との時間的關係についても、前者が下層、後者が上層から出土した遺跡（佐倉市大林遺跡第9地点）があるいっぽうで、前者が上層、後者が下層から出土した遺跡（四街道市御山遺跡）もある。ソフトローム層の堆積条件を勘案すると、両石器群の時間的關係を層位的上下關係からストレートに求めることは困難であるが、逆に、両石器群が時間的に接近する可能性を示唆する出土状況ともいえるのである。

以上のように、ソフトローム層から出土する石刃石器群と槍先形石器群との關係は不明瞭な点が多い。そこで、本稿では両石器群について考えてみたい。

2. 房総半島における石刃石器群の概要

ここでは、房総半島におけるソフトローム層中位を中心に出土した石刃石器群として、千葉市緑区南河原坂第3遺跡A地点、市原市下鈴野遺跡第2文化層、佐倉市御塚山遺跡第7地点第2文化層、四街道市御山遺跡第Ⅷb文化層、白井市一本桜南遺跡第7文化層、袖ヶ浦市百々目木B遺跡を検討する。このほかに、市原市武士遺跡第6・7文化層、市川市今島田遺跡、鎌ヶ谷市落山遺跡南部地区、佐倉市大林遺跡第9地点第Ⅲ文化層、四街道市大割遺跡第5文化層、印旛郡本埜村雨古瀬遺跡、同大門遺跡などの例があげられる。

(1) 市原市下鈴野遺跡第2文化層（第1・2図）

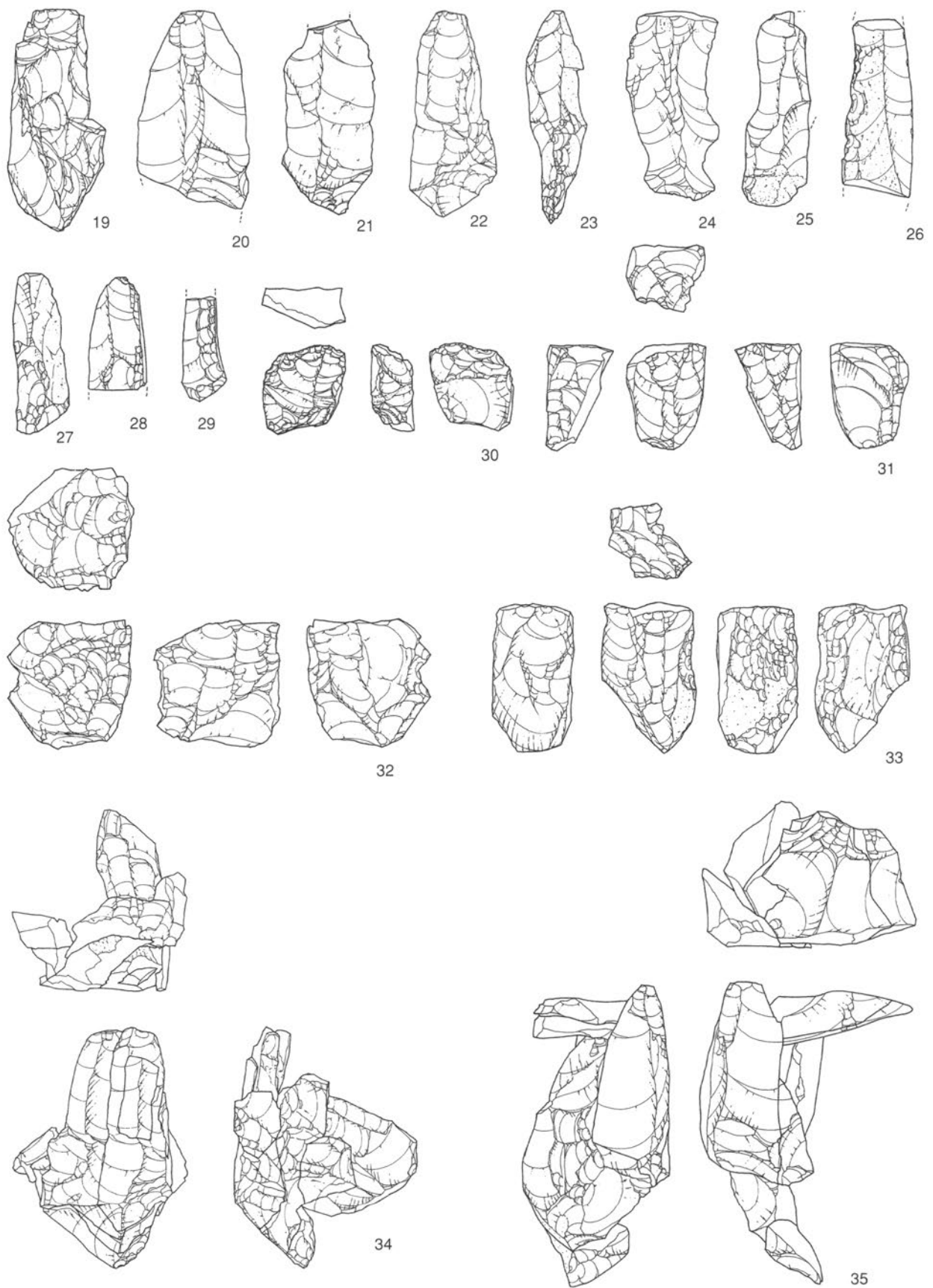
石器群の出土層準はソフトローム層の中位を中心としており、4か所のブロックから石器550点と礫531点が出土している。

石器組成は、ナイフ形石器12点、搔器2点、削器1点、彫器4点、石刃111点、敲石類6点、剥片類（加工痕ある剥片、使用痕ある剥片、剥片、碎片）382点、石核26点、両極石核（楔形石器）6点、石器石材の組成は、黒曜石7点、安山岩7点、流紋岩5点、頁岩類（凝灰岩、頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩など）137点、チャート24点、砂岩1点、ホルンフェルス18点、メノウ351点である。

石器石材のなかで6割以上を占めるメノウは、節理面が赤褐色、内部は橙色半透明で斑の入るものと、乳白色ないしは灰白色不透明のものが多い。接合資料が少ないため原石の大きさや形状は不明瞭であるが、



第1図 市原市下鈴野遺跡F地点 (1) (土屋ほか編 2003, S = 3 / 5)



第2図 市原市下鈴野遺跡F地点(2)(土屋ほか編 2003, S = 3 / 5)

拳大程度からさらに大きなものまで、さまざまな大きさの原石が想定される。頁岩類は、淡緑色や淡褐色でよく珪化しているもの、黄褐色や淡黒灰色であまり珪化していないものなど多種多様であるが、その多くは北関東から東関東にかけての範囲に由来すると考えられる。また、房総半島南部の嶺岡産も散見される。反面、房総半島の石刃石器群に広く利用されている、硬質緻密で光沢に富む東北産はみられない。

母岩分類は、資料総数550点のうち491点に対して行われ、58母岩が識別された。このうち、石器製作作業との関連が想定される母岩は、頁岩類7母岩(96点)、チャート3母岩(20点)、メノウ7母岩(278点)で、少なくとも全資料の80%は、本遺跡で製作、廃棄された可能性が高い。また、石刃についても75%の資料が上記17母岩に含まれており、本遺跡で製作された資料の多いことがわかる。

石器製作作業に關与する母岩は、剥片、石核の形状などから、少なくとも自然面が除去されて以後の石核が持ち込まれ、消費されたと考えられる。各母岩は母岩消費の後半段階の資料を中心に構成される。

ナイフ形石器は、石刃を素材とし、斜め整形による2側縁調整を特徴とする。細身で5cmを越える大型品が3例(1・3・5)、その未成品が2例(2・4)ある。そのほか、小型の2側縁調整(7)、切出形(6)、形態不明の未成品(8)などがある。なお、ナイフ形石器の由来については、①素材生産に關与したと想定される母岩に帰属するもの6点、②同一母岩が1・2点しかなく、搬入品と考えられるもの1点、③同一母岩が3～5点で、小規模な素材生産が実施された母岩に帰属するのか、まとまった量の搬入品かはっきりしないもの5点である。彫器は、上ヶ屋型に關連するものが4点ある(9～12)。いずれも石刃ないしは縦長剥片を素材とし、すべて搬入品である。

石刃技法については、①打面は複数の剥離面によって構成される、②打面縁辺の細かな調整は乏しい、③石核の側面調整痕はみられるが、頭部調整はほとんどない、④打面再生がなされる、⑤作業の進行に伴って、打面と作業面の転移がみられる、などの諸要素があげられる。

以上、本石器群は、メノウ、頁岩類など北関東から東関東に由来すると想定される石材を中心として、搬入された作業途中の石核を用いて石刃生産からナイフ形石器に至るまでの諸作業を反映した資料である。黒曜石、安山岩、流紋岩、ホルンフェルス、嶺岡産頁岩などの石材も少量含まれるが、石器製作作業に關連する母岩は認められない。

(2) 四街道市御山遺跡Ⅷb文化層(第3図)

石器群の出土層準はソフトローム層の中位を中心とし、6か所のブロックから石器157点、礫11点が出土している。

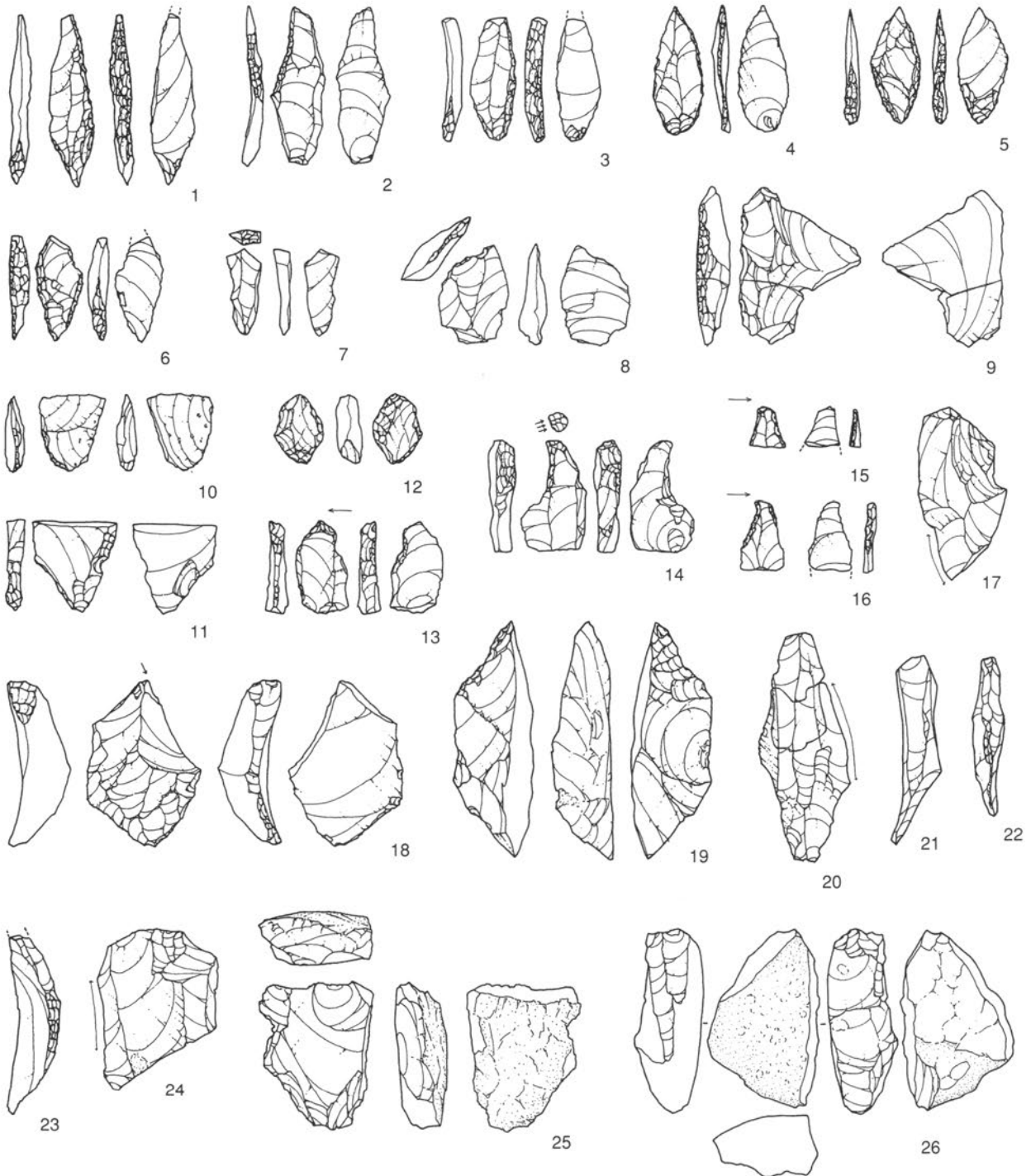
石器組成は、ナイフ形石器7点、削器3点、彫器5点、石刃14点、剥片類(加工痕ある剥片、使用痕ある剥片、剥片、碎片)123点、石核5点、石材組成は、黒曜石7点、安山岩6点、頁岩類(珪質頁岩、黒色頁岩、泥岩、珪質粘板岩、珪質凝灰岩などを含む)106点、チャート2点、メノウ3点、石英24点、その他1点である。

母岩分類は全資料に対して行われ、39母岩が識別された。このなかで、流紋岩1母岩(5点)、頁岩類4母岩(77点)、石英1母岩(8点)が石器製作作業に關する母岩と考えられる。とくに、珪質凝灰岩8は、ナイフ形石器、彫器、石刃、剥片類、石核などで構成され、同一母岩も43点と多い。したがって、石刃生産から石器の仕上げに至るまでの各工程を行っていると思定される。ただ、接合資料は少ない。

ナイフ形石器は、すべて石刃を素材とするが、斜め整形によって素材の形状を大きく変えた2側縁調整

(1・3・5・6), 素材の打面を基部に残し, 素材の長軸と石器の長軸がほぼ重なるなど, 素材の形状をよく残した2側縁調整(4), 端部調整(7・8)などがある。各形態とも, 総じて, 先述した下鈴野遺跡と比べて小振りである。彫器は, 石刃を素材とし, 端部に表裏に直交する短い槌状剥離を施したものである(14)。上ヶ屋型と考えられる。

ナイフ形石器, 削器, 彫器, 石刃などの石器は, ①遺跡内で石器製作作業の行われている母岩に帰属するもの20点, ②遺跡内で製作された形跡のない単独母岩に帰属するもの9点である。



第3図 四街道市御山遺跡第Ⅷb文化層(矢本編 1994, S = 3 / 5)

石器製作作業の痕跡を残す母岩については、初期の工程を示す資料（自然面を広く残す大型の剥片）や最終工程を示す資料（石核）が乏しい。

（3）佐倉市御塚山遺跡第7地点第2文化層（第4図）

石器群の出土層準はソフトローム層で、4か所のブロックから石器303点と礫11点が出土している。

石器組成は、槍先形石器5点、ナイフ形石器10点、搔器1点、削器4点、彫器4点、剥片類（石刃、使用痕ある剥片、加工痕ある剥片、剥片、碎片など）268点、石核（両極石核含む）11点、石材組成は、黒曜石14点、安山岩21点、流紋岩1点、頁岩類（頁岩、珪質頁岩、凝灰岩、珪質凝灰岩）184点、チャート66点、砂岩5点、ホルンフェルス4点、メノウ8点である。

母岩分類は、全資料に対して行われ、105母岩が識別された。このうち石器製作作業に関与したと想定される母岩は、黒曜石1母岩（8点）、安山岩1母岩（6点）、頁岩類9母岩（111点）、チャート3母岩（29点）の合計14母岩（154点）で、出土した資料の50%が本遺跡で製作、廃棄されたと考えられる。

ナイフ形石器は、石刃素材の2側縁調整（1・2・4・5）と端部調整（3）、横長剥片素材の切出形（7・10）がある。搔器は、石刃の端部に調整を施したもの（17）、彫器は、典型的な形態とはいえないものの、上ヶ屋型との関連が想定されるものがまとまっている（11～14）。

石刃（18～24）は、①複剥離面によって打面が形成され、その縁辺に細かな打面調整が施される、②頭部調整や石核の側面調整はほとんどみられない、③単設打面が中心であるが、両設打面も含まれる、などの諸要素がある。

槍先形石器は、中・小型細身の木葉形で、両面調整と片面調整があり（25～29）、黒曜石、安山岩、頁岩類、チャートを用いている。すべて単独母岩で、本遺跡内で製作した形跡はない。

石材は、房総半島南部嶺岡産を中心とする頁岩類が60%を占め、チャートが20%でこれに次いでいる。総じて房総半島南部に由来する石材が多い。

（4）白井市一本桜南遺跡第7文化層

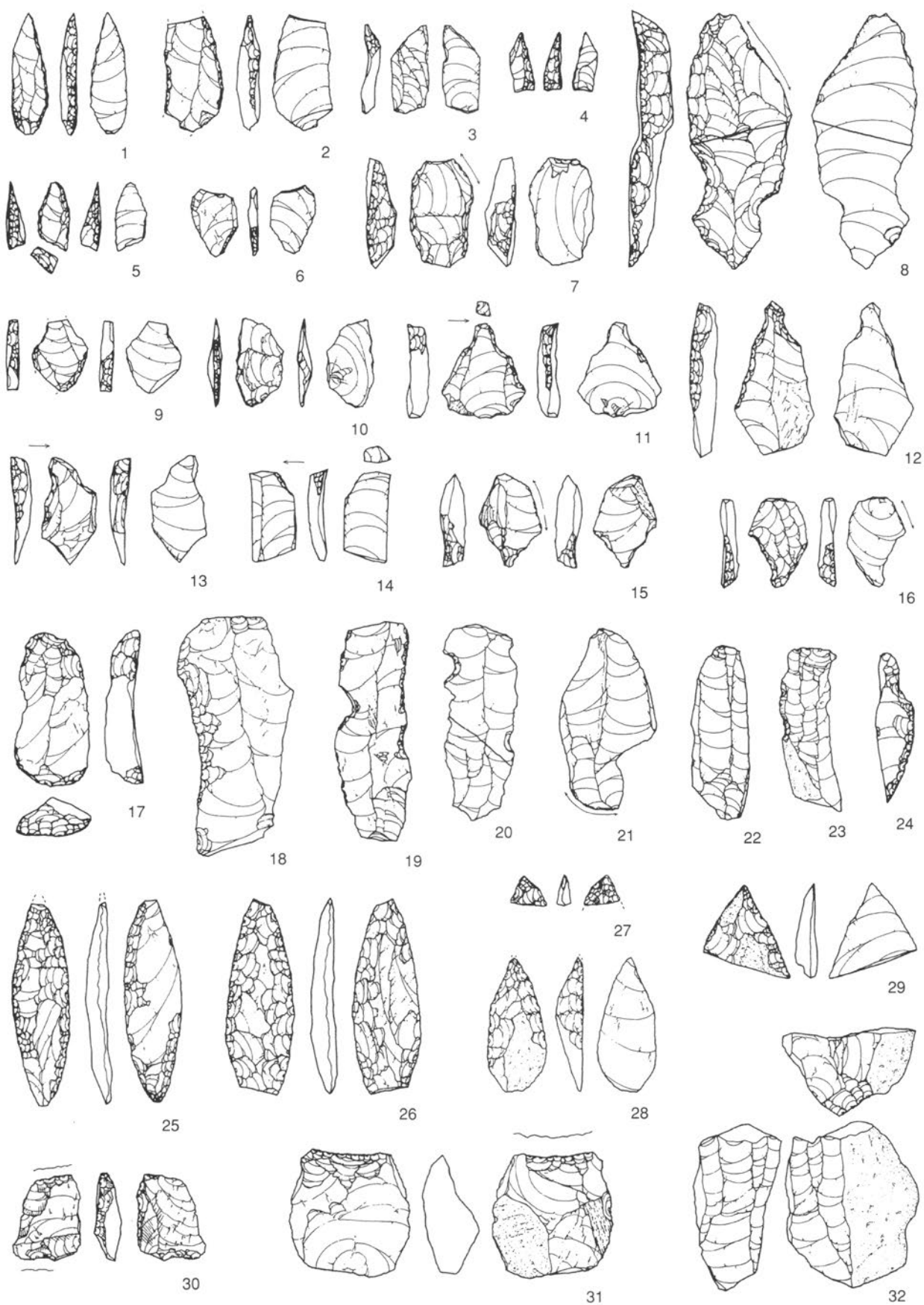
石器群の出土層準はソフトローム層上部で、ブロック1か所から石器250点と礫2点が出土している。

石器組成は、槍先形石器4点、ナイフ形石器6点、彫器2点、石刃15点、剥片類222点、石核1点、石材組成は、黒曜石71点、流紋岩1点、頁岩類177点、チャート1点である。

なお、槍先形石器4点、ナイフ形石器1点、石刃2点を対象として黒曜石の原産地推定分析を行った結果、すべて栃木県高原山産と判定された。

ナイフ形石器は、石刃を素材とする2側縁調整と基部調整である。石材は、褐色ではあるがきめの粗い頁岩類で、北関東産と考えられる。彫器は、中型の石刃を素材とする角形が2点ある。このうち1点は、小坂型と考えられる。また、彫器の削片が10点ある。

石刃は、①複剥離面による打面で、打面調整および石核の側面調整がみられる、②頭部調整はみられない、③単設打面が主体である、などの諸要素がある。主体となる頁岩類については、母岩分類が行われていないためはっきりしないが、石刃相互の接合資料がみられないことから、おおむね搬入品と考えられる。ただし、不定形の剥片が一定量みられ、若干接合資料もあることから、打面再生もしくは石核の稜形成を伴う素材生産がわずかに行われたかも知れない。いっぽう、黒曜石については、石質の類似する資料がま



第4図 四街道市御塚山遺跡第7地点第2文化層 (渡辺編 1993, S = 3 / 5)

とまっております、剥片生産を行ったようである。

槍先形石器は、小型片面調整の木葉形で、すべて黒曜石を用いている。未成品1点と欠損品（基部側）3点で、詳細は不明である。不定型の剥片を素材とすると考えられる。

（5）袖ヶ浦市百々目木B遺跡（第5・6図）

石器群の出土層準はソフトローム層下部を中心とし、3か所のブロックから石器1908点と礫646点が出土している。各ブロックとも長軸10m以上の広がりをもっているものの、直径3～5mの範囲に大半の石器、礫が密集する。

石器組成は、ナイフ形石器14点、槍先形石器2点、搔器17点、削器3点、彫器8点、剥片類（石刃、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片、碎片を含む）1827点、石核36点、石材組成は、黒曜石61点、安山岩124点、流紋岩12点、頁岩類（珪質頁岩、凝灰岩などを含む）1482点、チャート17点、砂岩54点、ホルンフェルス31点、メノウ126点、その他1点である。

3か所のブロックは、石器組成や礫の含まれ方に若干の相違があるものの、遺跡全体で識別した61母岩中8母岩が3か所のブロックにまたがって分布しており、また、13母岩は複数ブロック間で接合関係があるなど、相互に密接な関係が想定される。

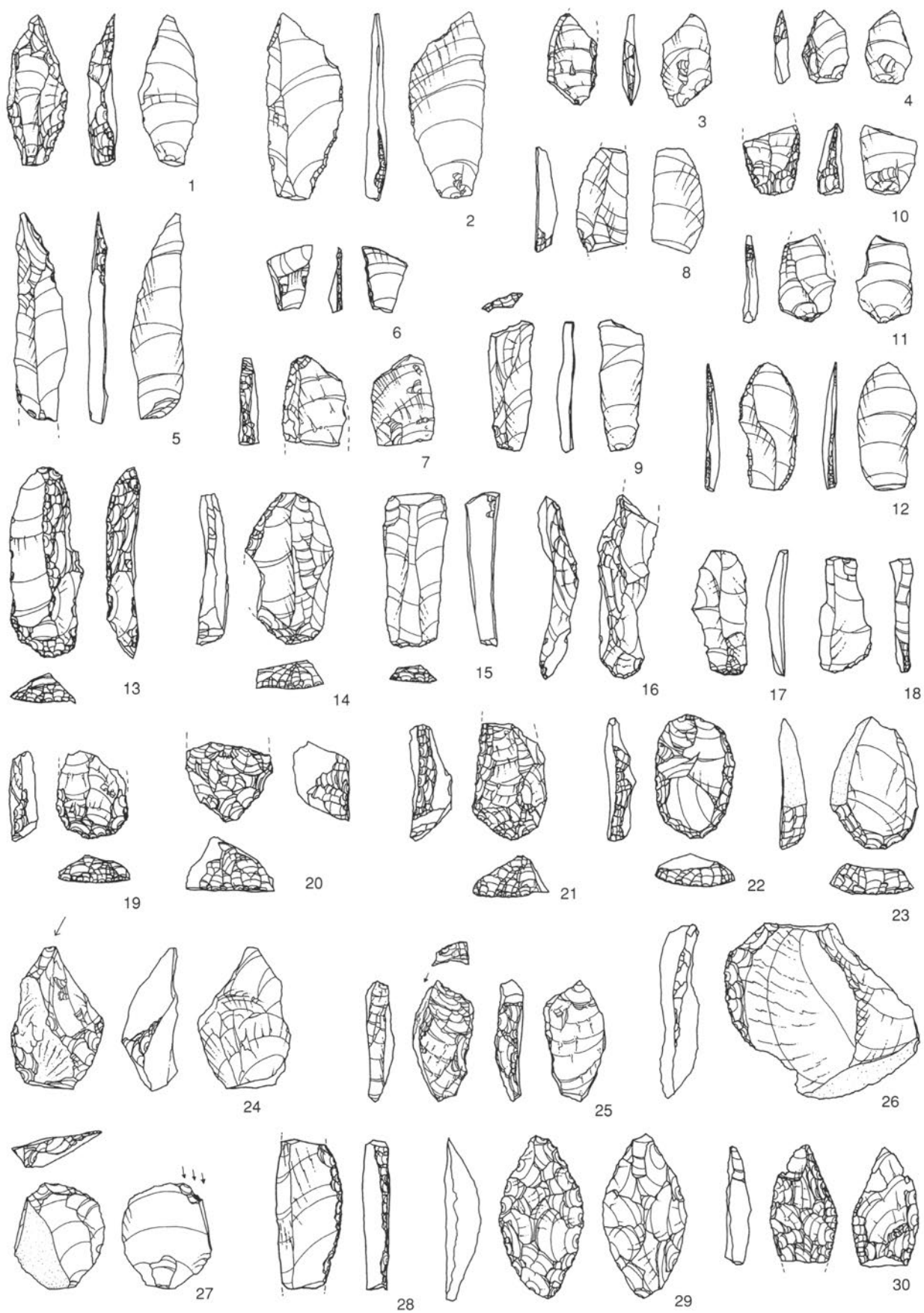
なお、槍先形石器1点、ナイフ形石器1点、搔器2点、剥片類2点を対象として黒曜石の原産地推定分析を行った結果、すべて箱根・畑宿産と判定された。

ナイフ形石器は、石刃を素材とし、打面を基部に残して、基部と先端を中心に調整加工がなされる形態（1～5・8・10～12）が多い。石材は、嶺岡産の頁岩を中心として、産地ははっきりしない頁岩類、メノウなどを用いている。搔器は多く、頁岩類、メノウによる石刃を素材とするもの（13～18）、黒曜石による不定型の剥片を素材とするもの（19～21）などがある。

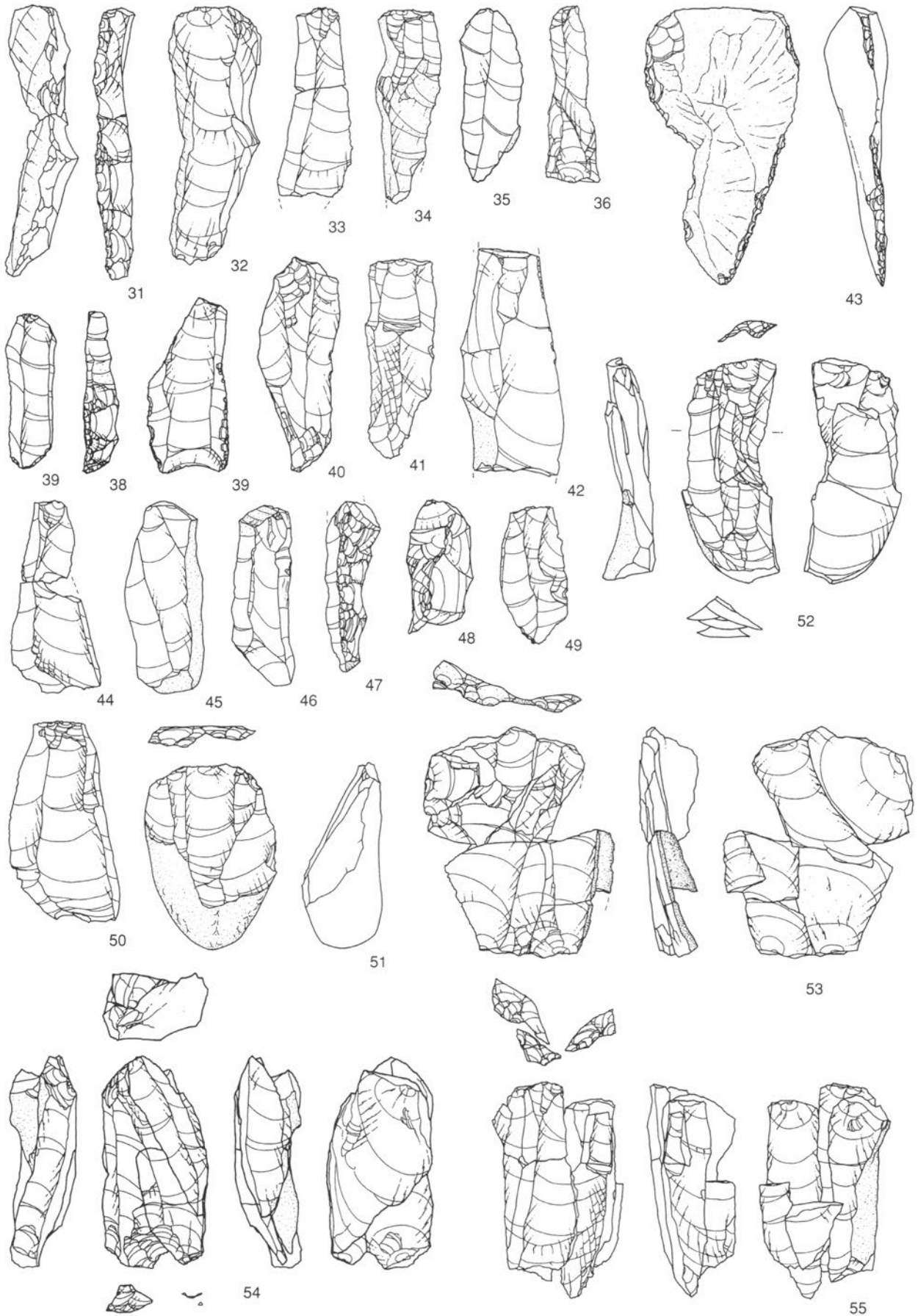
石刃は100点ほどであるが、石材は嶺岡産頁岩を主体とし、産地不明の頁岩類、メノウ、チャート、安山岩（トロトロ石）などが加わる構成である（31～42、44～50）。原石ないしは分割礫が持ち込まれ、石刃生産が行われている。嶺岡産頁岩については、角礫に近いものも含まれているが、それ以外の石材は拳大程度の円礫が多い。産地不明の頁岩類も小振りの円礫が多く、上総丘陵砂礫層に由来する可能性がある。

石刃技法は、①打面は複剥離面によって形成される、②打面調整および石核の側面調整を行っている、③頭部調整は顕著ではない、④打面および作業面の転移がある、などの諸要素がある。石刃と同一母岩のなかには不定型の剥片が含まれており、石核調整に関連する資料と考えられる。ただし、典型的な打面再生剥片はみられない。

槍先形石器は、安山岩による小型両面調整の木葉形（29）と黒曜石による小型片面調整の木葉形（30）各1点がある。前者は、槍先形石器本体に調整剥片2点が接合するほか、同一母岩と想定される調整剥片類8点の接合資料（53）があることから、遺跡内で調整加工が行われたと考えられる。ただし、原石ないしは分割礫などから剥片生産を行った形跡はなく、素材となる厚手の剥片は搬入されたと想定される。後者は、先端部左側縁に短い槌状剥離のある有槌尖頭器である。黒曜石製の石器については、槍先形石器以外に搔器や中・小型の剥片類がある。石質が相互に類似することから母岩分類は行われていないが、接合資料がないこと、細かな碎片は一定量含まれるものの石核がみられないことから、素材剥片が搬入され、調整加工がなされたものと、製品として搬入されたものの二者があり、素材生産は遺跡外で行われたと考



第5図 袖ヶ浦市百々目木B遺跡(1) (稲葉編 1998, S = 3 / 5)



第6図 袖ヶ浦市百々目木B遺跡(2) (稲葉編 1998, S = 3 / 5)

えられる。

以上、各石材は消費状況からみて、次の二とおりがある。

A：頁岩類，チャート，メノウ，ホルンフェルス，安山岩（トロトロ石）などの石材が該当する。原石や分割礫が搬入され，遺跡内で石刃，剥片の生産が行われる。頁岩類は，珪化度が高い嶺岡産が圧倒的に多く，これに上総丘陵砂礫層に由来する可能性のあるものが加わっている。チャート，ホルンフェルスなども，その由来は同様と考えられる。

B：箱根・畑宿産黒曜石，安山岩などの石材が該当する。製品，未成品あるいは素材剥片が搬入される。

ナイフ形石器や搔器，石刃の中にも搬入品の可能性が高いものが存在するが，おおむね石刃石器群はAグループ，槍先形石器や搔器の一部などはBグループに帰属するものが多い。

(6) 千葉市南河原坂第3遺跡A地点（第7図）

石器群の出土層準はソフトローム層中部で，15か所のブロックから石器613点，礫33点が出土している。

石器組成は，ナイフ形石器16点，槍先形石器5点，削器6点，彫器5点，錐状石器2点，敲石類2点，剥片類（石刃，加工痕ある剥片，使用痕ある剥片，剥片，碎片）550点である。石材組成の詳細は不明であるが，黒曜石，安山岩，流紋岩，頁岩類，チャート，ホルンフェルス，メノウなど多種多様な石材が用いられている。剥片類がまとまって分布する空間があること，接合資料も一定量含まれることから，小規模ながらも遺跡内で剥片生産の行われていたことがわかる。

ナイフ形石器は，石刃を用いた2側縁調整（1～5），基部調整（10～12），1側縁調整（9）と，不定型あるいは横長剥片を用いた切出形（6～8・13）がある。房総半島南部の嶺岡産と考えられる頁岩類が卓越し，これに北関東産と想定される頁岩類やメノウ・玉随などが加わっている。彫器は，石刃素材で先端部の2方向に急角度の調整加工を行った後，表裏に直交する短い刃部を作成したもので（15・16），上ヶ屋型彫器と考えられている。

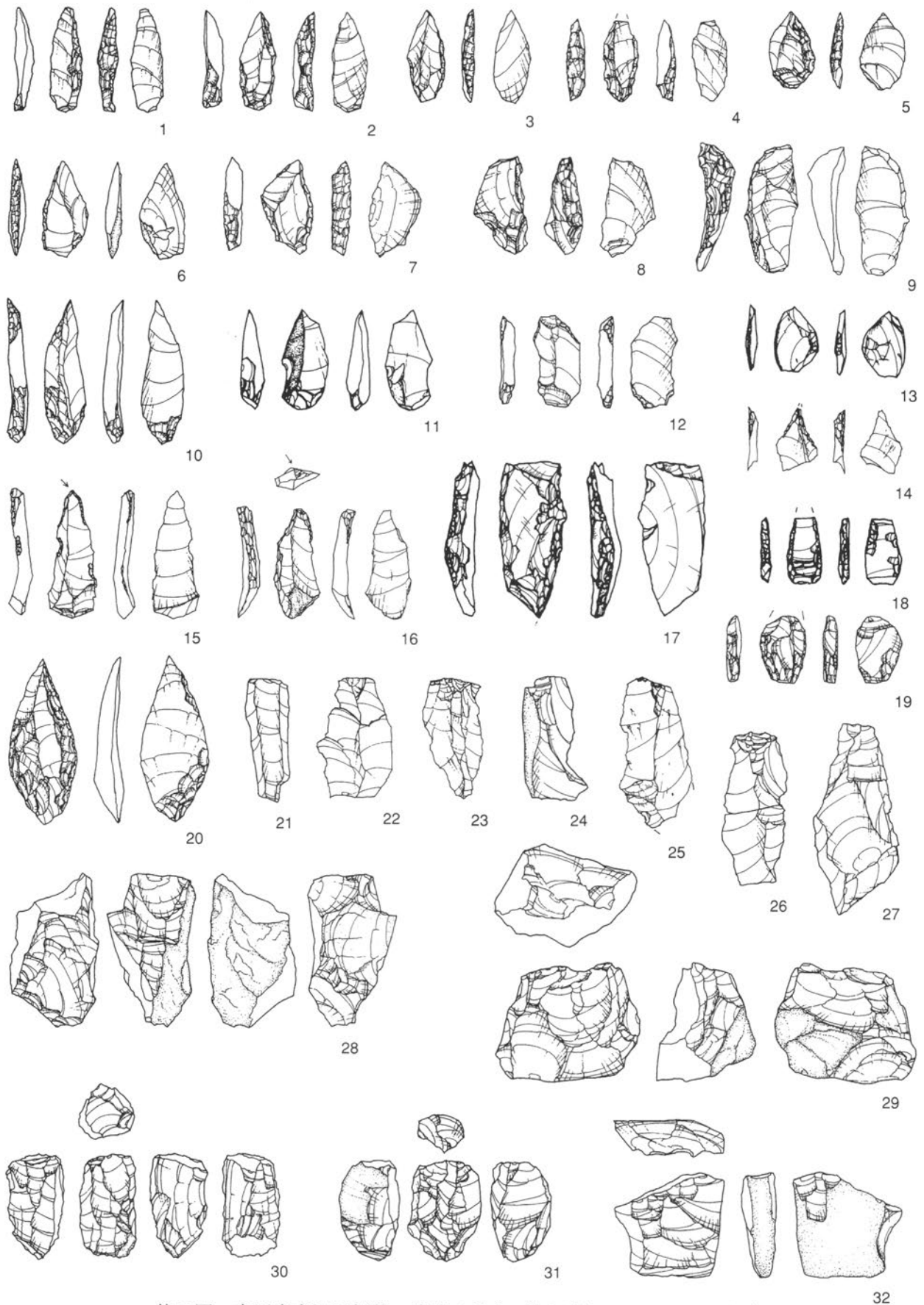
槍先形石器は5点出土している。いずれも石器群の集中するブロックから離れて分布するものが多く，共伴関係ははっきりしない。5点のうち2点は，黒曜石（19）と頁岩類（20）を用いた周辺調整の木葉形で，最大幅が中央よりも器体基部よりにある左右対称形の有樋尖頭器である。

(7) 小 結

石刃を主体とする石器群は，以下のようにまとめることができる。

①石器組成は，ナイフ形石器を主体として，搔器，削器，彫器，槍先形石器を少量含む構成である。ナイフ形石器は2側縁調整が多く，これに基部調整や切出形が加わる。下鈴野遺跡F地点，御山遺跡第Ⅷb文化層は斜め整形の2側縁調整が多く，百々目木B遺跡では基部調整が顕著であり，時期差を考慮すべきかも知れない。彫器は上ヶ屋型が特徴的にみられる。槍先形石器は，細身の木葉形と左右対称形の有樋尖頭器の2種類がある。

②ナイフ形石器，彫器は石刃を素材とし，搔器，削器は石刃および不定型の剥片などさまざまな形状の剥片類を素材とする。石器石材は，北関東から東関東，および房総半島南部（嶺岡，上総丘陵砂礫層）産と想定される頁岩類，メノウが多い。槍先形石器は黒曜石や安山岩など，石刃素材の石器とは異なる石材を用いている。



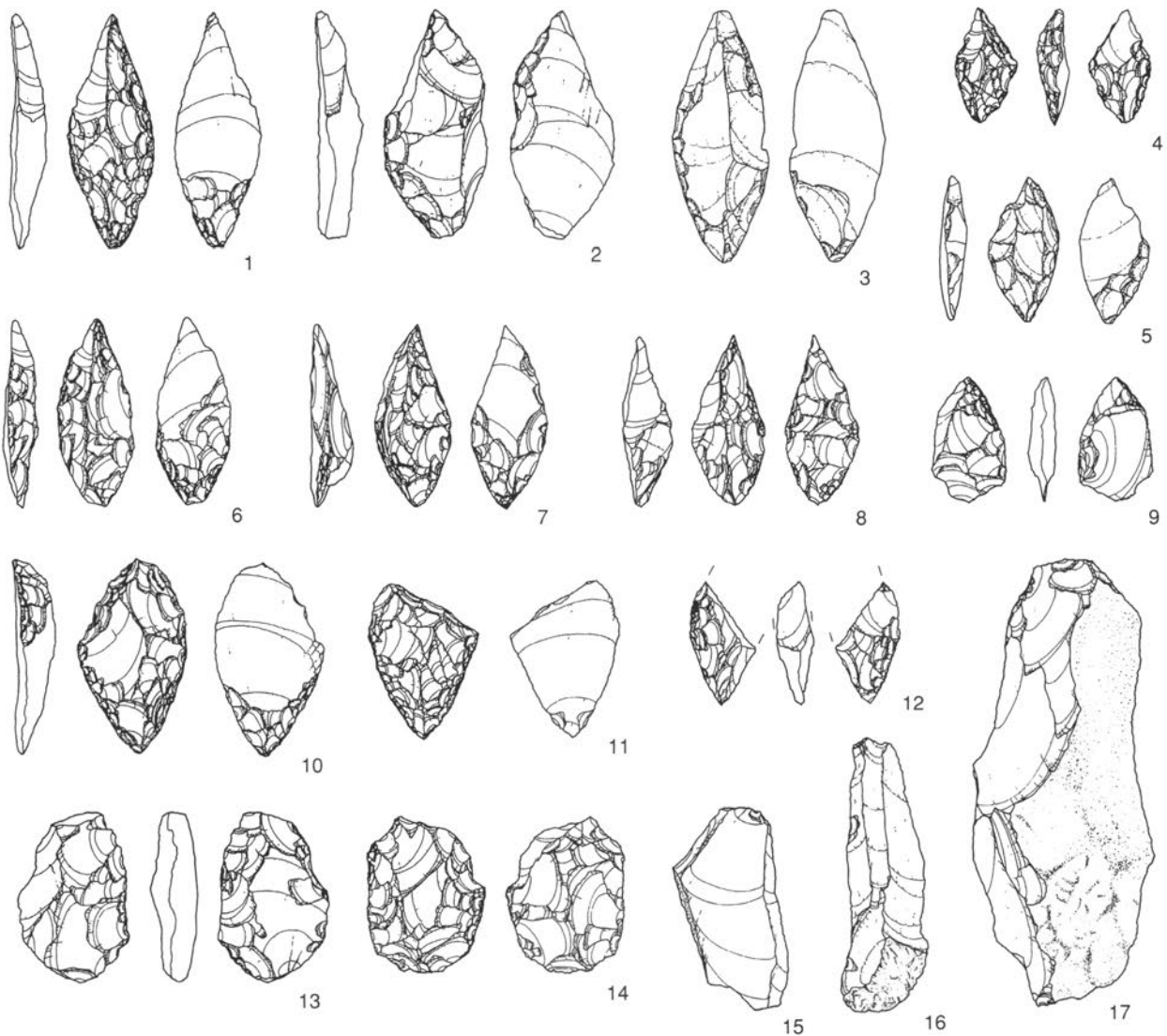
第7図 市原市南河原坂第3遺跡A地点 (島田編 1996, S = 3 / 5)

③ナイフ形石器，搔器，削器などは，素材生産から調整加工に至る各段階の石器製作作業を房総半島諸遺跡で行っているが，槍先形石器は石刃石器群の遺跡では製作痕跡がなく，「構造外器種」である。

④石刃石器群は，基本的に母岩消費の後半段階に帰属する資料で，原石の段階から作業を開始する母岩は，房総半島南部の遺跡を除くと稀である。これは，房総半島北部には良質な石材が産出しないことと関連すると考えられる。したがって，母岩消費前半段階の遺跡が，石材採取地により近い場所に存在すると想定される。

3. 房総半島における槍先形石器群の概要

房総半島における槍先形石器群として，松戸市上貝塚貝塚，鎌ヶ谷市五本松No. 3 遺跡第V文化層，四街道市御山遺跡第Ⅷ a 文化層，佐倉市大林遺跡第9 地点第Ⅱ文化層 b，山武郡芝山町浅間台遺跡を検討する。



第8図 松戸市上貝塚貝塚 (岡田ほか編 1996, S = 3 / 5)

(1) 松戸市上貝塚貝塚 (第8図)

石器群の出土層準はソフトローム層中位で、石器499点と礫246点が出土している。規模の大きなブロック1か所と捉えられるが、石器と礫の分布は若干ずれている。

石器組成は、槍先形石器14点、石刃3点、剥片類481点、敲石類1点、石材組成は、安山岩8点、流紋岩26点、頁岩類344点、チャート119点、メノウ2点である。

槍先形石器は、中・小型で片面調整を主体とする左右対称形の有樋尖頭器である(1~14)。ただし、素材の背面側に調整加工が偏る、断面三角形の両面調整もある(8)。最大幅は基部寄りにあり、最大幅の位置よりも基部側は緩やかな曲線を描くが、先端側は直線的な滴涙形である。このほか、槍先形石器に関連した資料として、小型不定型の調整剥片類(ポイントフレイク)がある。ただし、剥片類の形状や大きさ、数量からみて、素材生産からの作業が行われたとは考えがたい。搬入された母型(ブランク)からの仕上げ、あるいは欠損に伴う再加工に関連する資料と考えられる。

槍先形石器に用いられている石材は、県南嶺岡産の頁岩(褐色で軟質のノジュールを含む)が多く、これに軟質の安山岩や流紋岩が少量加わる。

石刃は、嶺岡産頁岩によるもの(15・17)と安山岩によるもの(16)がある。いずれも遺跡内で製作した痕跡はなく、搬入品と考えられる。

滴涙形で左右対称形の有樋尖頭器は相模野編年Ⅳ期前半に特徴的であるが、房総半島でも千葉市南河原坂第3遺跡A地点(頁岩)・J地点(安山岩)、鎌ヶ谷市五本松No.3遺跡(黒曜石、頁岩)、袖ヶ浦市境遺跡(黒曜石)、同美生遺跡群(安山岩、チャート)など各地に分布し、その形態的特徴から、おおむね同時期と考えられる。

(2) 鎌ヶ谷市五本松No.3遺跡第Ⅴ文化層

石器群の出土層準はソフトローム層下部を中心とし、石器169点と礫189点が出土している。

石器組成は、槍先形石器14点、ナイフ形石器3点、削器1点、剥片類150点、石核1点、石材構成は、黒曜石110点、安山岩17点、流紋岩6点、頁岩類(珪質頁岩、黒色頁岩)17点、チャート5点、ホルンフェルス3点、メノウ11点である。

なお、槍先形石器3点、削片2点、槍先形石器の素材1点を対象として黒曜石の原産地推定分析を行った結果、和田峠周辺産4点、麦草峠産2点と判定された。

槍先形石器は、黒曜石4点、安山岩3点、流紋岩1点、頁岩類4点、チャート1点、メノウ1点である。形態は、小型両面調整および片面調整の木葉形で、左右対称形の有樋尖頭器である。最大幅が基部寄りにあり、基部は丸みを帯び先端部は直線的なものと、最大幅が胴部中位にあり、基部と先端部に大きな形状の違いがないものがある。石材による差異はみられない。母岩別にみると、①同一母岩を一定量もつものは、黒曜石4に2点(同一母岩15点)、黒曜石5に1点(同一母岩27点)の計3点があり、②単独母岩ないしはそれに類する母岩に帰属し、搬入品と想定されるもの11点がある。ただし、前者についても槍先形石器の製作が行われたにしては同一母岩が少なく、最終的な仕上げ、あるいは再加工に関連する資料と考えられる。

ナイフ形石器は、黒曜石による不定型の剥片を用い、形態的に不安定なもの2点、頁岩類による石刃素材のもの1点である。

(3) 四街道市御山遺跡第Ⅷa文化層 (第9図)

石器群の出土層準はソフトローム層下位を中心とし、2か所のブロックから石器363点、礫16点が出土している。

石器組成は、槍先形石器15点、搔器1点、削器1点、彫器1点、石刃2点、槍先形石器削片7点、剥片類336点、石材組成は、黒曜石350点、安山岩1点、流紋岩1点、頁岩類(珪質頁岩)8点、チャート1点、メノウ2点である。

なお、槍先形石器8点、削片1点を対象として黒曜石の原産地推定分析を行った結果、すべて栃木県高原山産と判定された。頁岩類は、硬質緻密で光沢に富んでおり、東北産と考えられる。

槍先形石器は、未成品、欠損品およびその破片のいずれかで、完形品はみられない。形態を判断できるものは、小型両面調整(調整加工は表裏が均等ではなく、横断面形は薄手のかまぼこ形)の木葉形で、左右対称形の有樋尖頭器が多い(1・2・6～8)。石材は、すべて黒曜石である。

母岩別資料を検討したい。黒曜石については、全資料の20%を対象として母岩分類が行われ、6母岩が認識された(黒曜石1～3・5～7)。槍先形石器は、黒曜石1に7点(同一母岩数30点)、黒曜石2に4点(同一母岩数6点)、黒曜石3に1点(同一母岩数1点)、黒曜石5に1点(同一母岩数1点)、黒曜石6に2点(同一母岩数22点)が帰属する。

以上のとおり、槍先形石器の多くは搬入品と想定される単独母岩ではなく、石器製作作業に関連する母岩のなかに含まれている。ただし、①母岩分類の行われていない小型の剥片類が数多く残されている(全体の80%)ことと、槍先形石器が小型品であることなどを勘案しても、各母岩における槍先形石器1点に対する調整剥片類(ポイントフレイク)があまりにも少ないこと、②大型で自然面の残る剥片類や石核がみられないことなどから、本石器群は、槍先形石器の製作作業全体を反映したものではなく、槍先形石器の母型(プランク)から仕上げまでの工程や、欠損品に対する再加工など、限定的な作業内容が想定される。

いっぽう、搔器(18)、彫器(19)、石刃(21・22)などは頁岩類を用いている。いずれも遺跡内で素材生産や調整加工を行った形跡のない単独母岩で、搬入品と考えられる。ただし、搔器や彫器などは遺跡内で刃部の再生を行った可能性はある。

なお、本文化層の上位からは石刃石器群(第Ⅷb文化層)が出土している。

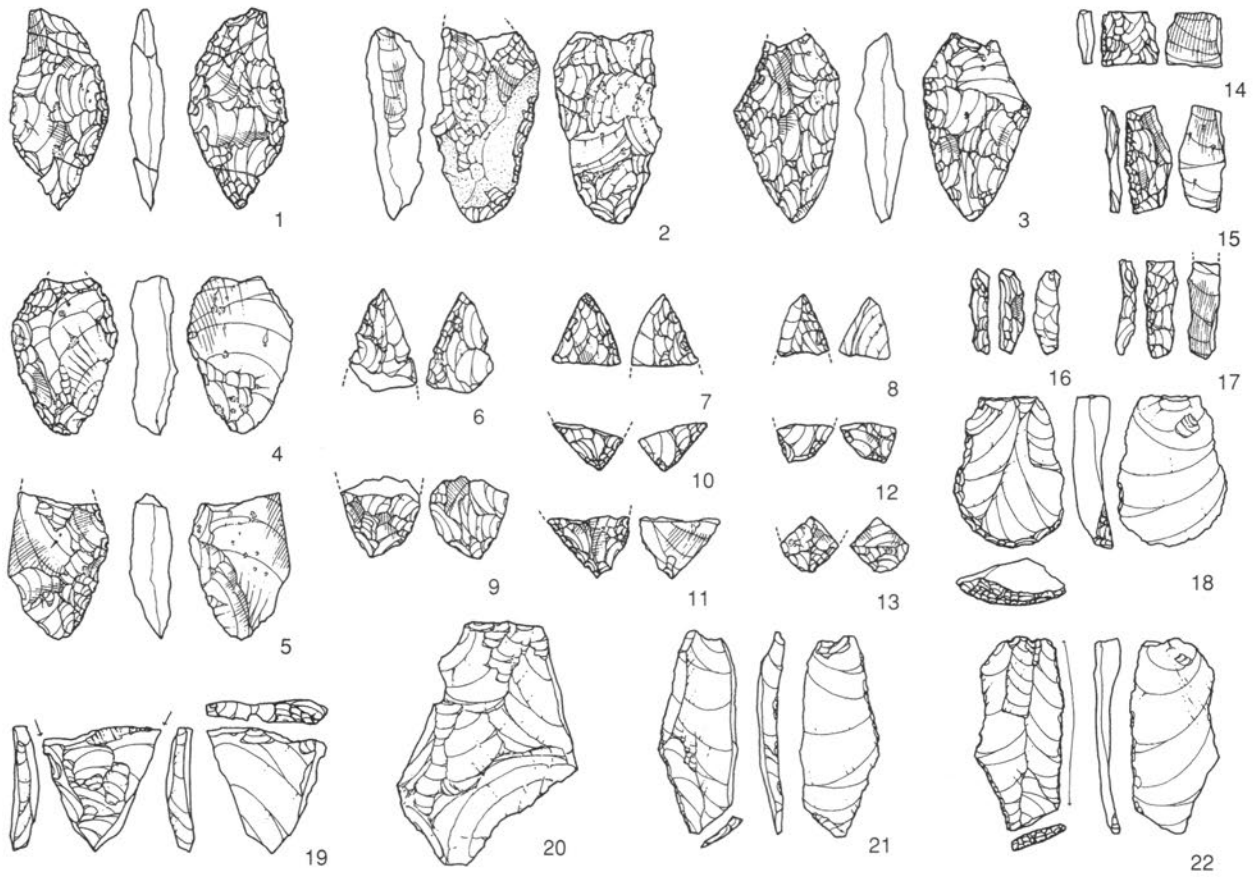
(4) 佐倉市大林遺跡第9地点第Ⅱ文化層b (第10図)

石器群の出土層準はソフトローム層で、ブロック2か所から石器255点が出土している。

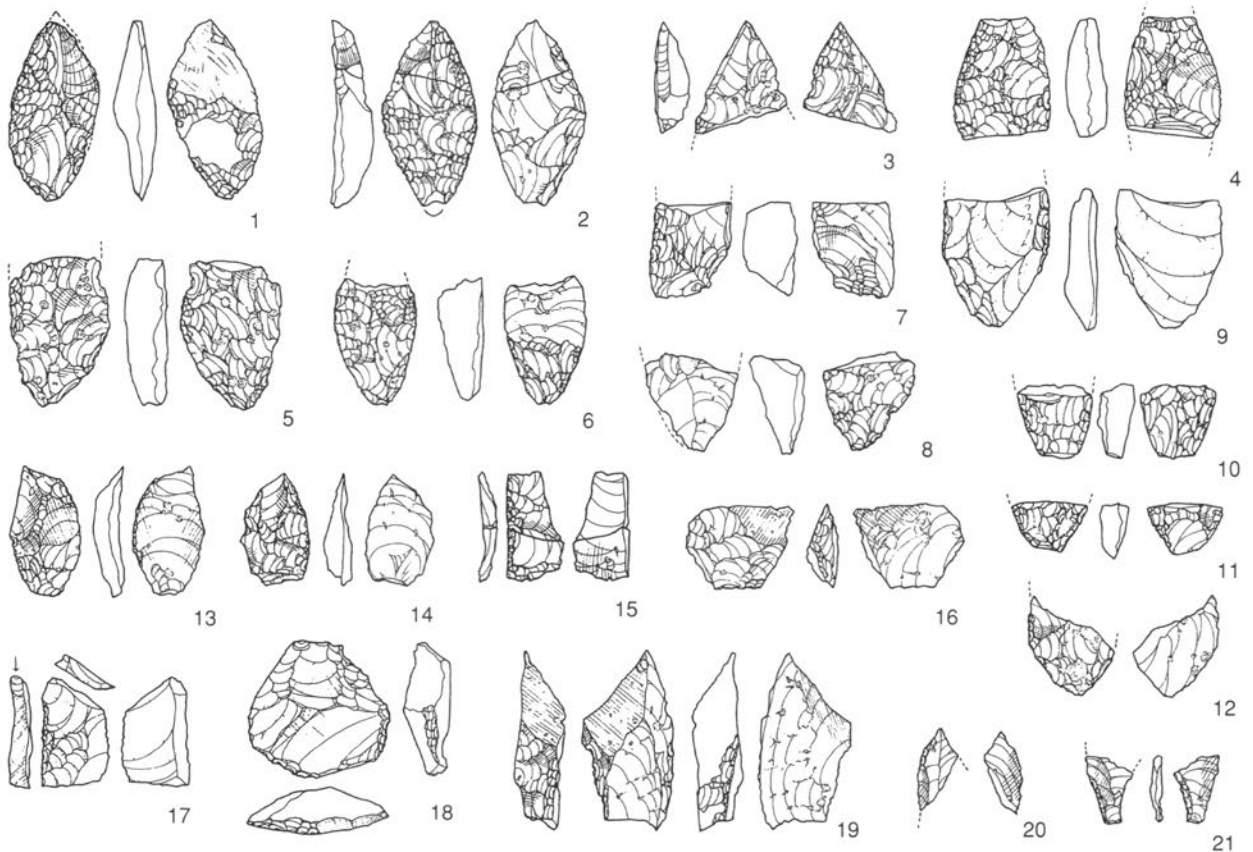
石器組成は、槍先形石器17点、ナイフ形石器1点、搔器1点、彫器1点、削片2点、剥片類233点、石材組成は、黒曜石249点、安山岩2点、頁岩類(凝灰岩)4点である。

なお、槍先形石器12点、ナイフ形石器1点、剥片類3点を対象として黒曜石の原産地推定分析を行った結果、槍先形石器1点が信州・和田峠周辺産(小深沢)、それ以外は栃木県高原山産と判定された。

槍先形石器は、安山岩による小型周辺調整の木葉形1点(9)をのぞいて、黒曜石による小型両面調整(1・3～5・10・11)および片面調整(2・6～8・12・14)の木葉形である。未成品と欠損品が多いが、形態の判定できるものは有樋尖頭器(1～4)である。



第9図 四街道市御山遺跡 (矢本編 1994, S = 3 / 5)



第10図 佐倉市大林遺跡第9地点第2文化層 (田村編 1989, S = 3 / 5)

黒曜石は全体の50%に対して母岩分類が行われ、5母岩が認識された(黒曜石24~26・52・53)。とくに、黒曜石26は同一母岩数が61点であるが、槍先形石器12点、ナイフ形石器1点、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片など多様な構成で、本遺跡で唯一消費された母岩である。槍先形石器1点あたりの調整剥片類が少ないこと、自然面を広く残す剥片が少ないことから、母型から槍先形石器を製作した(仕上げた)ものが中心であったと想定される。ただし、帰属母岩がはっきりしない黒曜石の多くが本母岩に含まれると仮定すると、同一母岩の内容が多彩で一定量の石器も含まれていることから、分割礫を持ち込み、剥片生産をも併せて行われた可能性も生じる。

ナイフ形石器は、黒曜石による横長剥片を用いた切出形(19)と小型不定型のもの(13・16・20)、搔器(18)は、頁岩類(凝灰岩)による不定型の剥片を用いたものがある。彫器(17)は、頁岩類(凝灰岩)による大型の削片を利用したようで、黒曜石だけではなく頁岩類を用いた有樋尖頭器をも伴っていた可能性がある。

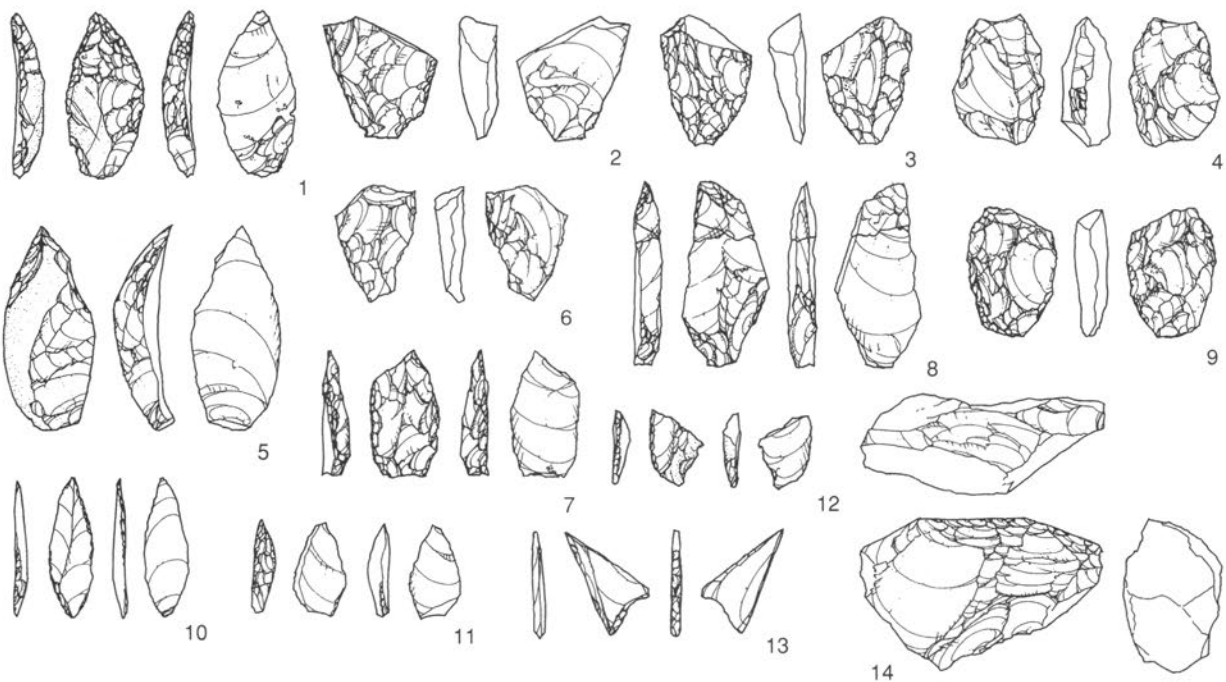
なお、本文化層の下位から石刃石器群(第Ⅲ文化層)が出土している。

(5) 山武郡芝山町浅間台遺跡(第11図)

石器群の出土層準は立川ローム層Ⅲ層上半を中心とし、ブロック1か所から石器239点、礫5点が出土している。

石器組成は、槍先形石器13点、ナイフ形石器2点、錐状石器1点、剥片類222点、石核1点、礫5点、石材組成は、黒曜石209点、安山岩13点、頁岩類(珪質頁岩)17点、砂岩2点、メノウ1点、その他2点である。

なお、槍先形石器9点、剥片類3点を対象として黒曜石の原産地推定分析を行った結果、すべて栃木県高原山産と判定された。頁岩類は、硬質緻密で光沢に富む東北産を含んでいる。



第11図 山武郡芝山町浅間台遺跡(廣瀬編 2000, S = 3 / 5)

槍先形石器は、小型の木葉形で、片面調整（1・2・5～8）と両面調整（3・4・9）がある。石材は、黒曜石が12点、安山岩が1点である。黒曜石は、母岩分類は行われていないが、石質によって11種類に大別されている。槍先形石器との関係は、黒曜石Aに4点（同一母岩の総数135点）、黒曜石Bに3点（総数14点）、黒曜石Fに3点（総数17点）、黒曜石Gに1点（総数4点）、黒曜石Jに1点（総数2点）、安山岩Aに1点（総数10点）が帰属しており、搬入品とはっきりわかるものは少ない。未成品や欠損品が多いこと、槍先形石器の調整剥片が多いことなどから、本遺跡内で槍先形石器の多くが製作されたと考えられる。

ナイフ形石器は石刃素材の2側縁調整（10・11）で、頁岩類を用いている。珪質頁岩Aに2点（総数7点）で、遺跡内で製作したか否かはっきりしないが、搬入品の可能性が高い。

（6）小 結

槍先形石器を主体とする石器群は、以下のようにまとめることができる。

- ①石器組成は、槍先形石器が主体を占め、搔器、削器、彫器、ナイフ形石器、石刃などを少量含む構成である。槍先形石器は、左右対称形の有樋尖頭器と木葉形の2種類がある。ナイフ形石器は、2側縁調整、切出形、小型不定型のものなど多様である。
- ②槍先形石器は、栃木県高原山産、または信州産の黒曜石を中心に構成される。いっぽう、石刃素材の石器は、頁岩類を用いている。
- ③槍先形石器は、当該遺跡外で製作された素材を用い、調整加工を中心として製作されているが、石刃素材の石器は槍先形石器群の遺跡では製作痕跡がなく、「構造外器種」である。したがって、石刃を生産する技術を保有し、これを行った遺跡が、槍先形石器を製作する遺跡とは別個に存在することが想定される。

4. まとめ

房総半島におけるソフトローム層出土の石刃石器群は、北関東から東関東にかけての山間部や房総半島南部で採取される頁岩類や東関東産と想定されるメノウを主たる石材としている。そして、房総半島諸遺跡には作業途中の石核が搬入され、石刃生産からナイフ形石器をはじめとする各種石器の製作作業までが行われている。いっぽう、これに伴う槍先形石器は、黒曜石や安山岩が多用され、石刃石器群とは異なる石材が使用されている。また、石刃石器群を主体とする遺跡で槍先形石器が製作された形跡はない。

槍先形石器群は、栃木県高原山産や信州産の黒曜石、房総半島南部産の頁岩類などを主たる石材としている。房総半島諸遺跡には槍先形石器の製品、半製品および素材剥片が搬入され、仕上げの調整加工や欠損に伴う再加工が行われている。いっぽう、これに伴う石刃あるいは石刃素材の石器は、北関東産その他の頁岩類が多用され、槍先形石器とは異なる石材が使用されている。また、槍先形石器を主体とする遺跡で石刃が生産された形跡はない。

以上のとおり、石刃石器群では槍先形石器が、槍先形石器群では石刃が「構造外器種」として搬入されているが、この場合、それぞれ「構造外器種」を用いた諸活動は、あまり積極的ではなかったと想定される。そのいっぽうで、こうしたあり方は、両石器群が相互に関連していたことをも予想させる。

それでは、様相の異なる2種類の石器群は、どのような関係なのだろうか。

まず、①旧石器時代の集団は、基本的に石器石材を自前で入手し、石器製作作業を行った、②旧石器時代の集団は、回帰的移動によって定期的に変化する「身近な生活空間」のなかで石器石材を調達したという前提で、次の三つの可能性について考えてみたい。

- ①両石器群は、帰属時期の異なる石器群である。
- ②両石器群は、同一時期ではあるが、主たる分布域が異なる別系統の石器群である。
- ③両石器群は、同一集団が生業活動の違いなど諸事情を反映して形成した石器群である。

①について、当該の石刃石器群は、先述したとおり、相模野編年Ⅳ期前半に対比される可能性が高い。いっぽう、槍先形石器群は、左右対称形の有樋尖頭器を含み、大きさや調整加工にバリエーションが乏しいこと、定型的な石刃技法による石器を含むことなど相模野編年Ⅳ期前半の石器群と共通点があり、同時に、槍先形石器が石器群のなかで主体を占めること以外には、Ⅳ期後半ないしはⅤ期前半の石器群との共通点をみいだすことはできない。もちろん、槍先形石器の量的な関係に時間差を認める見解や石刃技法が相模野台地よりも新しい時期まで残るという房総半島の地域的特質をも考慮しなければならない。

このことについて、印旛郡印旛村平賀一ノ台遺跡に代表される、左右非対称形の有樋尖頭器と石刃関連石器を多量に含む石器群をみると、定型的な石刃素材のナイフ形石器を伴っていないこと、槍先形石器と石刃の両者がともに同じ頁岩系石材を用いていることなどの特徴があり、本稿で取り上げた槍先形石器群との時間的前後関係を想定することができる。したがって、今まで検討対象としてきた石刃石器群と槍先形石器群との間に、時間的な開きを認めることはできない。

②について、斜め整形による2側縁調整のナイフ形石器と上ヶ屋型彫器の組合せを特徴とする石刃石器群は、「茂呂系ナイフ形石器群」、あるいは対象をより限定した「砂川期石器群」との共通点が多く、関東地方から中部地方にかけて広く分布している。また、左右対称形で黒曜石を主たる石材とする有樋尖頭器も関東地方から中部地方を中心に分布している。相模野台地では、大和市下鶴間長堀遺跡第Ⅲ文化層、同深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層などの石刃石器群に槍先形石器（黒曜石を中心とする有樋尖頭器が多い）を少量伴う石器群が立川ローム層L2層からB1層下部にかけて多数出土していること、大和市No.210遺跡では有樋尖頭器を主体とし、ナイフ形石器を少量伴う石器群がB1層下部から出土していることから、石刃石器群と槍先形石器群が同一地域において併存する可能性が高い。さらに、中部地方の黒曜石原産地では、男女倉遺跡群を典型例とする有樋尖頭器を主体とする石器群があり、関東地方出土の有樋尖頭器との密接な関連が考慮されている。いずれにしても、石刃石器群と槍先形石器群とを主たる分布域が異なる別系統の石器群とみる必要はない。

①、②に対する検討により、筆者は③を採用したいと考えているのであるが、いくつかの問題点がある。③を採用すると、一般論として、旧石器時代は広域的回帰移動、環境と季節性、生業活動、石器形態の4要素が互いに連動するとの仮定により、同一地域に同一集団が相異なる石器群を残すことは矛盾するのではないかと、という反論が予想される。例えば、ある季節に房総半島で石刃石器群に反映される生業活動を行っていた場合、別の季節には房総半島以外の地域で槍先形石器群に反映される生業活動を行っていたのではないかと考えられるからである。

しかし、旧石器時代の集団が季節的に広域的回帰移動を行っていたと想定しても、時計の針が動くように、異なる地域を1年間に1回ずつ滞在しては移動するというのを考える必要はない。つまり、年間の

スケジュールのなかで、同一地域が季節を異にして複数回利用された可能性を否定するものでもないのである。

次に視点を変え、主たる石器の形態と石材との関係について考えてみたい。それは、信州産黒曜石と栃木県高原山産黒曜石、北関東産頁岩がそれぞれ採取される地域では、その生業活動が異なり、それに応じて利用する石器形態も異なる可能性がある、ということである。同時に、主たる石器形態が異なると、原石の選択から素材生産の方法、石器あるいは素材の携帯方法に至るまで差異が生じることにもなる。立川ローム層のソフトローム層の時期に、石刃石器群と槍先形石器とが石材を違えて存在することは、こうした諸条件が連鎖し、関与していたからではないだろうか。

以上、同一地域であっても季節を異にして別々の生業活動を行った反映として、あるいは採取される石材の性状とその携帯方法、運用方法に連動する反映として石器群の様相に違いが生じるといった可能性を考慮しつつ、両石器群がおおむね同一層準から出土すること、少なくとも両石器群とも石刃技法と槍先形石器の製作技術とを併せもつこと、相互補完に近いあり方とみることが可能な出土状況であることから、房総半島におけるソフトローム層中位にあつては、同一集団が機会を異にして石刃石器群と槍先形石器群を残したと考えたい。

最後になりましたが、落合章雄、田村 隆、永塚俊司、二宮修治の各氏には、千葉県文化財センター研究紀要22の作成過程で、槍先形石器群について多くのご教示を賜りました。それが本稿にも深く影響を与えております。記して感謝します。

参考文献

- 両宮龍太郎ほか編 1998『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅡ -白井町一本桜南遺跡-』(財)千葉県文化財センター
- 安蒜政雄 1988「V 和泉校地遺跡の性格」『明治大学和泉校地遺跡発掘調査報告書』明治大学和泉校地遺跡発掘調査団, 60-72頁
- 稲葉理恵編 1998『-千葉県袖ヶ浦市- 百々目木B・C・清水頭・清水沢遺跡』(財)君津郡市文化財センター
- 岡田光広ほか編 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書 流山市南割遺跡・上貝塚第Ⅱ地点・上貝塚第Ⅰ地点・上貝塚貝塚・下花輪第Ⅲ遺跡・三輪野山第Ⅱ遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 加藤晋平ほか 1969『中本遺跡 北海道先土器遺跡の発掘報告』
- 島田和高編 1996『土気南遺跡群V 南河原坂第3遺跡』(財)千葉市文化財調査協会
- 田村 隆 1989「二項のモードの推移と巡回 -東北日本におけるナイフ形石器群成立期の様相-」『先史考古学研究』第2号, 1-52頁
- 田村 隆 1992「石材についての諸問題 -特に関東地方の石材採取戦略について-」『考古学ジャーナル』第345号, ニュー・サイエンス社, 2-7頁
- 田村 隆 2000「木刈峠再訪 -房総半島小型石槍の変遷-」『千葉県史研究』第8号, (財)千葉県史料研究財団, 28-57頁
- 田村 隆ほか 2003「下野一北総回廊外縁部の石器石材(第1報) -特に珪質頁岩の分布と産状について-」『千葉県史研究』第11号, (財)千葉県史料研究財団, 1-11頁
- 田村 隆編 1989『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1 -佐倉市御塚山・大林・大堀・西野・芋窪遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 土屋治雄ほか編 2003『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ -市原市下鈴野遺跡-』(財)千葉県文化財センター
- 廣瀬和之ほか編 2000『主要地方道成田松尾線X -芝山町浅間台遺跡-』(財)千葉県文化財センター

- 村山好文編 1985『平賀 平賀遺跡群発掘調査報告書』平賀遺跡群発掘調査会
- 矢本節朗編 1994『四街道市御山遺跡(1) -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書I-』(財)千葉県文化財センター
- 矢本節朗編 2002『平成13年度企画展公開シンポジウム「有樋尖頭器の発生・変遷・終焉」 予稿集・記録集』千葉県立房総風土記の丘
- 渡辺修一編 1991『四街道市内黒田遺跡群 -内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書-』(財)千葉県文化財センター
- 渡辺修一編 1993『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書2 -御塚山遺跡第7地点の調査-』(財)千葉県文化財センター
- 渡辺智信編 2001『千葉県文化財センター研究紀要22 尖頭器石器群の研究 -各時代における諸問題1-』(財)千葉県文化財センター